

令和7年(2025年)12月4日

テーマ展「彦根城と城下町—江戸時代の彦根のかたちー」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

つきましては広報方について、よろしくご高配賜りますようお願い申し上げます。

1 展覧会名称

テーマ展「彦根城と城下町—江戸時代の彦根のかたちー」

2 会期

令和7年(2025年)12月10日(水)～令和8年(2026年)2月16日(月)

*12月16日(火)・25日(木)～31日(水)・1月15日(木)・16日(金)は休館

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会場

彦根城博物館 展示室 1

4 展示の趣旨

江戸時代の日本では、徳川将軍を中心とする幕府と、大名を中心とする藩が一緒に国を治める体制を築き、全国の藩では、大名と重臣が城に集まり、城を拠点に領地を治める仕組みにより政治を行いました。この政治体制のもと、江戸時代は、約250年もの間、戦争が行われなかったという、世界史において稀有な時代となりました。彦根城世界遺産登録を目指している滋賀県と彦根市では、彦根城がこの政治の仕組みに関する施設を最も良く残す、世界的価値のある遺産であると認識し、登録に向けた取り組みを推進しています。本展覧会は、政治施設に加え、城の軍事施設、城下町の社会基盤施設、交通・商業施設など、政治を基礎から支えたものに注目し、大名の統治の仕組みを紹介するものです。

慶長5年（1600）、関ヶ原合戦で大きな戦功を挙げた井伊直政（1561-1602）は、佐和山城主となり、18万石の領地を得ました。直政は2年後に亡くなりましたが、跡を継

いだ子の直継のもと、徳川氏による西国支配の重要軍事拠点を設けるために、公儀普請として彦根城の築城が始まり、同 11 年末頃には天守と城郭の中心部が竣工しました。一方、築城と並行して城下町の建設も進められ、河川の付け替えや山の削平、低湿地の埋め立て造成などを伴う大規模な土木工事により、かつては芹川河口の農村地帯であった場所に、全く新しく都市が誕生しました。

井伊家は、家臣である武士を城下町に集住させ、武士の生活物資を供給する商人や職人を誘致しました。そのため、城下町は、領国における交通・経済の中心としても発展していました。このような都市建設の仕方は、織田・豊臣政権のもとで発展した築城と城下町建設の手法を受け継いだものでした。築城と城下町建設は、大坂の陣への出陣により一時滞りましたが、陣後に彦根藩単独で進められ、元和 8 年（1622）に外堀の櫓、門など惣構えの完成を見ました。その後、彦根藩の領地が 30 万石まで増し、家臣の人数が増えたことにより、城の惣構えの外にまで城下町が拡大し、江戸時代中期には人口 3 万人を超す大規模な都市に発展しました。

本展示では、具体的には、石垣や土手、堀、櫓、門、武家屋敷、足軽屋敷といった軍事施設のほかに、道路や水路、街区などの基盤施設、御殿や藩の役所などの統治・行政関連の施設、交通・流通関連の施設、商工業の機能を有する町家の施設などを取り上げます。これらの施設がどのような形態をもち、どのように配置され、彦根城と城下町の軍事・政治・交通・経済の各機能をどのように実現していたのかを明らかにします。

5 展示作品

38 件（別紙リストのとおり）

6 観覧料

一般 700 円（560 円）

小・中学生 350 円（280 円）（ ）内は 30 名以上の団体割引料金

* 常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

（1）関連講座

名称：「彦根城と城下町」

日時：令和 8 年（2026 年）1 月 17 日（土）午後 2 時～ *90 分程度

会場：彦根城博物館 講堂

報道資料



定員：50名 *当日先着順、午後1時30分より受付開始

資料代：100円 *展覧会の観覧には、別途、観覧料が必要

講師：渡辺恒一（当館学芸員）

（2）ギャラリートーク

日時：令和7年(2025年)12月13日(土) 午後2時～ *30分程度

会場：彦根城博物館 展示室1

講師：渡辺恒一（当館学芸員）

その他：観覧料が必要

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：竹内光久・渡辺恒一

電話：0749-22-6100

メール：museum@mx.hikone.ed.jp

テーマ展「彦根城と城下町－江戸時代の彦根のかたち－」展示資料リスト

	指定	資料名	数量	品質形状	法量 (cm) 縦×横	制作年代	所蔵
I 繕城と城下町の建設							
1		彦根古図	1枚	紙本彩色	81.2×116.8	年月日未詳 (江戸時代)	当館 (彦根川原町高崎家文書)
2		彦根城下絵図	1枚	紙本彩色	43.9×54.0	年月日未詳 (江戸時代)	当館 (武川屯家文書)
3-1	市指定	御城下惣絵図 一	1幅	紙本彩色	145.2×134.1	天保7年 (1836)	当館
4	重文	古兵部少輔・右近大夫・古掃部頭並倅共・先掃部頭又ハ古キ家来共覚書	1冊	紙本墨書	26.6×17.0	元禄10年 (1697) 8月28日	当館 (彦根藩井伊家文書)
5		彦根城内絵図	1面	紙本彩色	67.6×136.0	年月日未詳 (江戸時代後期)	当館
6	重文	諸物成留	1冊	紙本墨書	14.0×20.0	安永8年 (1779)	当館 (彦根藩井伊家文書)
7	重文	善利川土手普請につき井伊掃部頭窺書 幕府老中宛	1通	紙本墨書	19.5×49.3	天明2年(1782)4月	当館 (彦根藩井伊家文書)
II 軍事防衛の施設～石垣・堀・櫓・門～							
3-2	市指定	御城下惣絵図 四	1幅	紙本彩色	174.8×133.2	天保7年 (1836)	当館
3-3	市指定	御城下惣絵図 三	1幅	紙本彩色	143.7×134.1	天保7年 (1836)	当館
石垣と堀							
8	重文	御法度類并風俗ニ付御示類	1冊	紙本墨書	27.5×19.4	年月日未詳 (江戸時代)	当館 (彦根藩井伊家文書)
9	重文	江戸幕府老中奉書	1通	紙本墨書	42.0×56.3	元文2年 (1737) 4月26日	当館 (彦根藩井伊家文書)
10	重文	御城使寄合留帳	1冊	紙本墨書	27.4×19.5	延享5年 (1748) 4月	当館 (彦根藩井伊家文書)
11		彦根城堀浚いにつき御普請方役所用状	1通	紙本墨書	18.1×28.4	年未詳10月6日 (江戸時代)	当館 (磯崎家文書)
櫓・門・番所・木戸							
12	重文	御城使寄合留帳	1冊	紙本墨書	26.3×19.4	明和4年 (1767) 11月	当館 (彦根藩井伊家文書)
13		御櫓御武具之覚	1冊	紙本墨書	11.6×31.8	年月日未詳 (江戸時代)	個人 (足軽佐藤家文書)
14		彦根城中門・番所覚書	1通	紙本墨書	18.0×75.4	年月日未詳 (江戸時代)	個人 (三居孫太夫家文書)
15		御城下町略絵図	1枚	紙本彩色	53.0×78.3	嘉永6年 (1853) 9月	個人 (三居孫太夫家文書)
III 政治・行政の施設～表御殿・松之下・藩士役宅・扶持人屋敷～							
16		彦根城郭・建物絵図	1枚	紙本彩色	40.8×80.5	安永3年 (1774) 7月	個人 (三居孫太夫家文書)
17		新古家並記 上冊	1冊	紙本墨書	23.7×16.2	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来典籍)
18	重文	御參勤御上国雜記	1冊	紙本墨書	25.2×17.2	寛政5年 (1793) 頃	当館 (彦根藩井伊家文書)
19		宮田彦左衛門病気につき五平太見習願御役儀相続願留	1冊	紙本墨書	24.9×17.4	天明6年 (1786) 10月	当館 (四十九町代官家文書)
20		新古家並記 下冊	1冊	紙本墨書	23.7×16.2	年月日未詳 (江戸時代後期)	当館 (井伊家伝来典籍)

テーマ展「彦根城と城下町－江戸時代の彦根のかたち－」展示資料リスト

	指定	資料名	数量	品質形状	法量(cm) 縦×横	制作年代	所蔵
IV 侍屋敷と足軽屋敷							
3-4	市指定	御城下惣絵図 五	1幅	紙本彩色	143.4×134.4	天保7年（1836）	当館
21	市指定	宇津木三右衛門家屋敷絵図	1枚	紙本墨書	39.4×27.2	年月日未詳 (江戸時代)	個人(宇津木三右衛門家文書)
22		野添市右衛門明キ屋敷目録	1冊	紙本墨書	14.8×40.5	宝暦2年（1752） 2月18日	個人(花木家文書)
23		屋敷裏土手拝借証文	1通	紙本墨書	17.9×219.8	天明5年（1785）	当館(彦根藩関係文書)
足軽組屋敷							
24		吉村家屋敷家相図	1枚	紙本墨書	49.2×46.2	年月日未詳 (明治時代)	当館(吉村宏昌氏寄贈資料)
25		善利橋足軽組類焼宅覚・絵図控	1枚	紙本彩色	76.4×107.4	天保13年（1842） 2月16日	個人(三居孫太夫家文書)
V 町と町屋敷～内町と外町、新町							
内町							
3-5	市指定	御城下惣絵図 弐	1幅	紙本彩色	113.0×134.2	天保7年（1836）	当館
26		白壁町古郷改帳	1冊	紙本墨書	27.2×20.4	慶安2年（1649） 6月	当館(白壁町衣斐家文書)
27		白壁町本家借家家並五人組帳	1冊	紙本墨書	31.2×21.4	文政3年（1820） 2月18日	当館(白壁町衣斐家文書)
28		四十九町切支丹五人組改帳	1冊	紙本墨書	30.8×22.5	寛保2年（1742） 2月21日	当館(彦根城下各町宗門改帳)
29		諸事願書留帳	1冊	紙本墨書	27.2×19.5	享和3年（1803） ～文政4年（1821）	当館(伝馬町文書)
外町							
3-6	市指定	御城下惣絵図 六	1幅	紙本彩色	190.5×134.5	天保7年（1836）	当館
30	市指定	平田町家並図	1枚	紙本墨書	45.6×83.2	宝暦5年（1755） 10月28日	個人(中村尚家文書)
31	市指定	平田町本家借家家並五人組帳	1冊	紙本墨書	28.6×20.4	享和2年（1802） 2月	個人(中村尚家文書)
32	市指定	町内の裏借家建築認可につき御触書写	1冊	紙本墨書	30.8×20.5	享保12年（1727） 3月20日	個人(中村尚家文書)
33	市指定	家屋敷譲渡・売買につき平田町定書案	1冊	紙本墨書	31.2×21.2	年月日未詳 (江戸時代)	個人(中村尚家文書)
34		川原町本家借家家並五人組帳	1冊	紙本墨書	28.0×20.2	嘉永3年（1850） 2月	当館(彦根川原町高崎家文書)
新町							
35		所持之御田畠屋敷留帳	1冊	紙本墨書	31.6×21.8	寛政7年（1795） 1月	当館(大橋中村前田家文書)
IV 交通・流通の拠点施設～伝馬町・松原湊・外船町～							
36	重文	松原口御門付近絵図	1枚	紙本彩色	36.5×103.7	年月日未詳 (江戸時代)	当館(彦根藩井伊家文書)
37		外船町への着船・舟荷につき町奉行所・船奉行所掻書等写	1通	紙本墨書	27.6×34.8	弘化2年（1845）	当館(磯崎家文書)
38		伝馬町絵図	1枚	紙本墨書	58.4×166.2	寛政12年（1800）	当館(伝馬町文書)

資料解説

1 彦根御城下惣絵図 全6幅(資料リストNO. 3-1から3-6)

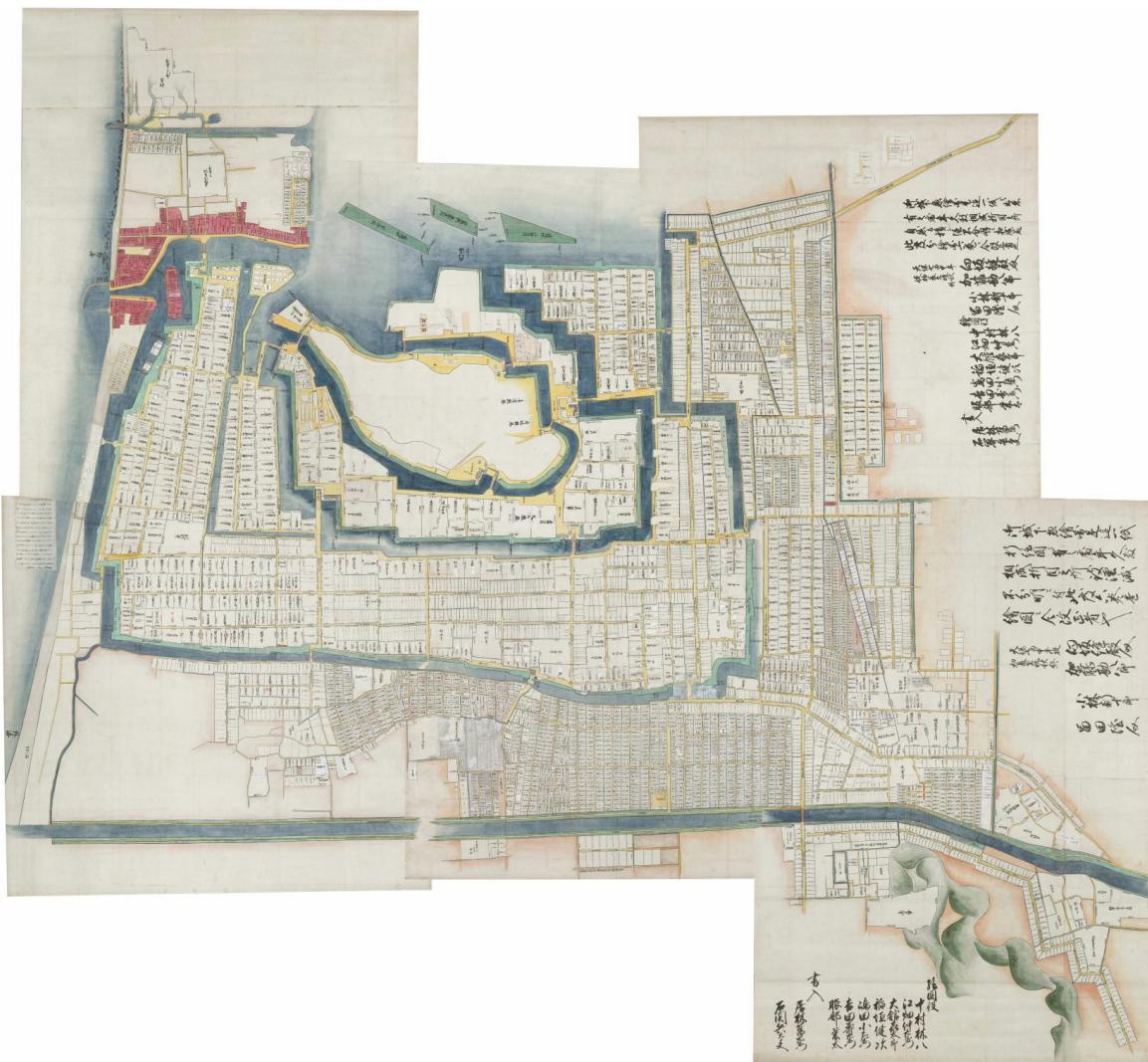
縦 145.2 cm 横 134.1 cm ほか

江戸時代 天保7年 (1836)

当館蔵

江戸時代後期の天保7年 (1836) に、彦根藩の普請方役所が作成した絵図。掛け軸装の全6幅で城下全体を構成しています。記載内容から、城下町の土地の管理・現状維持を目的として作成したものと考えられます。彦根城下町の図としてもっとも精度が高く、かつ詳細なものであり、城下町の空間構造を理解するうえで、基本となる資料です。

道路の幅や長さ、屋敷地の間口・奥行きの長さを逐一記載し、町屋敷裏の排水路なども詳細に描いています。まぐち 侍屋敷・足軽組屋敷・扶持人屋敷などの武家地には屋敷主の名前を記す一方で、町人屋敷には屋敷主の記載がなく、絵図の表現から、城下町の内部に身分・階層ごとの居住地区分があつたことを知ることができます。また、城の石垣の管理を担った藩の普請方役所がこの絵図を作成していることは、城下町が、城に附属した軍事施設としての側面を持っていたことを示しています。



2 彦根城内絵図

1面 (資料リストNO. 5)

縦 67.6cm 横 136.0cm

江戸時代後期写

当館蔵

彦根城の主要部であった第一郭は、内堀に囲まれた彦根山と山裾の部分です。山上には、天守が建つ本丸のほか、西の丸、鐘の丸などの郭が連なり、石垣と、郭を区切る大堀切、櫓、門など、堅固な防御施設を備えた軍事要塞でした。山裾には表御殿や、米蔵などの建物がありました。本資料は、江戸時代前期の第一郭とその周辺部を描いた絵図です。江戸時代後期の絵図とは異なり、東側の山裾の表御殿隣には御守殿と風呂屋があり、鐘の丸の御守殿の横に客殿、北側の山裾に材木蔵が建っています。また、建物・櫓・塀・堀などの間数も記されており、彦根城第一郭の変遷を知るうえで貴重な資料です。



3 江戸幕府老中奉書

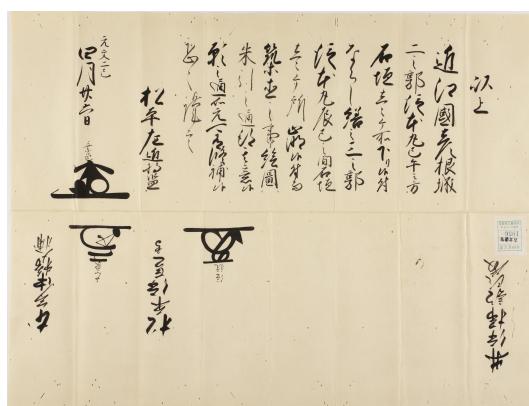
1通 (資料リストNO. 9)

縦 42.0cm 横 56.3cm

元文2年（1737）4月26日

当館蔵（彦根藩井伊家文書）

城郭の防御機能を支える最も重要な施設は、城に廻らされた石垣と土手、堀などの土木構築物でした。藩が天守や櫓、御殿などの城内建築物を修繕する際には、幕府の許可を必要とはしませんでしたが、石垣を修復する際には、必ず幕府に届け出て、許可を得なければなりませんでした。当時、幕府と大名の間で、石垣が城郭を構成する主要な施設であると認識していたことがわかります。本資料は、江戸幕府の老中から8代井伊直定に宛て、彦根城の石垣の修復を許可した文書です。この時の修復は具体的には、二之郭（=第二郭）の中堀に面した石垣が下がった1か所と、三之郭（第三郭）の外側に面した石垣が崩れた1か所を築き直すというものでした。



4 川原町本家借家並五人組帳

1冊 (資料リストNO.34)

縦28.0cm 横20.2cm

嘉永3年(1850)2月

当館蔵(彦根川原町高崎家文書)

彦根城下の町人居住地は53町からなり、彦根城の惣構え(外堀の石垣ライン)の内側にある内町と、惣構えの外側にある外町とに分けられていました。川原町は外町のうちの1町で、城下南部に位置しました(現在の銀座商店街の大半と、花しょうぶ通りの一部と登り町グリーン通り商店街の一部)。同町は、彦根城下町から中山道に繋がる道路に面し、道沿いには多くの店が並んでいました。本資料は、同町に住む家持ちと借家人からなる家の当主を五人組単位でまとめ、各人の職種を記載し、同町から彦根藩に提出した文書です。青物、塩肴、酒、菓子などの食料品や、木綿や足袋などの衣料品、紙や瀬戸物などの生活雑貨品などを商う様々な職種が記されています。賑わう商店街の様子を窺うことができます。



5 伝馬町絵図

1枚 (資料リストNO.38)

縦58.4cm 横166.2cm

寛政12年(1800)

当館蔵(伝馬町文書)

彦根城下町の町割は、直線道路で区切った長方形の区画を作り、さらにその内部を、間口が狭く、奥行きが長い短冊形の屋敷に分割し、道路の両側に並ぶ屋敷を一つの町とするものでした。これは、豊臣政権が京都で行った町割を原型とするものでした。伝馬町は、彦根城惣構えの内側にあった内町の1町で、城下町東部を縦断する朝鮮人街道沿いにありました。同町は、彦根宿と呼ばれる街道の宿駅でもあり、荷物運送にあたる人と馬を常置し、荷物の引き継ぎ業務を行う問屋の施設が置かれています。本資料は、伝馬町全体の屋敷を描いた平面図。短冊形の屋敷区画を基本として、屋敷内部に借家が複雑に展開しています。通りに面した各屋敷には、屋敷主の名前と、表間口の間数、その間数に応じて町人が藩に負担する「壹軒役」「半役」などの基準高を記しています。借屋(「かしや」)居住者は「馬持」のみ名前を記しています。個別の町の家屋敷の形態と町の機能との関連を考えるうえで貴重な資料です。

